

受けており、術後癒着に基づくイレウスと腸捻転を合併させるものである。

われわれの病院における1146例の産婦のうち13.7%に開腹術の既往があり、かなり大きい手術をその後受けているものも少なくないが、一般に妊娠時のイレウスは少いとされている。

しかし開腹術が広く行われる様になった今日その可能性は増大したと考えられる。その時に母児の状態によってイレウス、並びに分娩に対する保存或は積極療法を適切に組合わせる必要がある。

### 67. 子宮温存をめぐる私共の見解

(岐阜大) 夏目 操

林 徹, 太田 和夫, 渡辺 坡

産科婦人科学的治療を行なうに当り、子宮を温存しながら目的を達成しうる場合がかなりあるように思われる。

産科婦人科学的常識から子宮摘出の *indicatio* とされている場合ですら工夫と努力を傾けることによつて子宮の温存に成功する場合が少なくないと考えられる。特にかかる配慮は若くして子供のない婦人に対して必要である。この様な見解に基づいて我々が扱った症例を報告する。

1. 子宮体部の全域に血液浸潤を認めた胎盤早剥の子宮を温存し得た例。

この症例の詳細は演題 145番で別の演者が述べるが、あえて子宮を温存し後日生児を挙げ得た症例である。

2. 子宮体部破奇病巣の核出例

29才家婦、子供なし。奇胎娩出3週後より性器出血あり、HSG像等より子宮前壁右側の破奇と断定。子宮全別を排し先ず化学療法を行ない次いで破奇病巣を核出し、術後再び化学療法を行なつた。10カ月後妊娠し、本年7月、正常な経産分娩で待望の生児を得た。

3. 子宮体部筋腫核出例

不妊又は流産の原因が子宮筋腫にあると思われ且つ従来の通念によれば子宮全別もやむを得ないと考えられる症例に筋腫核出術を施して子宮を温存し、後日生児を得た経験例のうち5例について述べた。

追加 (雄勝中央) 菅原義三郎

私は人工流産後強度の出血をくり返して子宮全別の必要が考えられた例に膈式に子宮動脈及び卵巣動脈を結紮して、子宮全別を免れた例を経験した。

追加 (東京都) 野田 吉隆

東京オペグループに於て胎盤早剥の腹式帝王切開術時薬物的ブラッドバンクのフィブリノーゲン投与に於て子

宮体温存をえた手術例4例に就いて追加します。

### 68. 最近経験せる月経瘻治療例に就いての所感

(北海道) 石井 碩, 石井 学一

月経瘻とは腹壁に生じた瘻孔より毎月経時周期的に出血を来す瘻孔について名付けたもので、その発生機転は1) 子宮ないしその付属器に加えられた手術創の不全治療のため瘻孔を形成するもの2) 瘻孔は子宮またはその付属器と直接交通していないが異所的子宮内膜増殖症から二次的に腹壁瘻を生ずるものとの2種類あり。

演者は20数年前北海道医学会総会において月経瘻の治療について講演せるも、今回は最近経験せる一次性の月経瘻の発生原因となつた手術中一番多い帝王切開術後に発生した該例について手術的に全治せしめた症例を報告し御参考に供せんとす。

患児は昭和3年1月10日生の1回産婦、昨年3月30日某病院において高年初産婦、微弱陣痛、児頭骨盤不適合等の理由にて腹式帝切を施行されたるも、創面は一次縫合なりしというも術後創面化膿し従来創口完全癒合せず、本年1月某大学外科に入院加療せるといふも全治せず、その頃より毎月経時創口より出血あり仍りて当院に来院せるものなるが、すなわち3月4日初診、月経瘻と認め3月10日瘻孔の別出と患者の希望により子宮腔上部切断術を併行、種々抗生物質の使用を行いたるも一時創面小化膿し4月11日全治退院せるものなるが、術後において月経瘻治療上篤と考慮せられたる卑見を、往年の該治療上における見界と現代における薬物殊に抗生物質依存主義とを対比して私見を述べんとす。

追加 (宮城県) 永井 泰

非常に興味あり、有益な例である。

かかる *Fistel* 例は主として縫合糸中心の感染である。*Fistel* はガーゼ交換だけでは難治、然し手術は難しい。小生も自験例をもつて居る。子宮外妊娠手術後に発生した例であるが、演者と同じように処理した。只手術創は一気に縫合せず2~3割合大きなガーゼを置き、抜去後は予め設定した縫合糸で手術創を閉鎖した。

追加 (弘前大) 品川 信良

出血が原因で子宮摘除が必要かと思われるようなものに対しては、線維素原などによる非外科的・薬物的な治療が勿論行なわれるべきである。しかし、それでも駄目で開腹のやむなきに至つた場合には、子宮摘除の前に両側の内腸骨動脈を結紮してみるべきと信じます。大抵の子宮出血はこれで止まります。また内腸骨動脈を結紮してもその後の妊娠は十分、期待できます。